新春対談２０２０

共に創る「学びの都（まち）三田」

若者の力でまちを元気に

今後ますます人口減少や少子高齢化が進行する中、まちがこれからも元気であり続けるためには、未来を担う「若者の力」が欠かせません。

市には多くの若者が集う高等教育機関があります。その豊かな教育資源を生かし、「学びの都（まち）」として、大学などとの連携や学生の皆さんと共にまちの活性化に取り組んできました。中でも、「教育・文化の核」であるカルチャータウンには、６千人もの若者が学ぶ「関西学院大学 神戸三田キャンパス」があり、開設以来、若者の育成はもとより、まちづくりへの提言や地域貢献など、まちの成長を支えてきました。

今回の新春対談では、高等教育機関、そこに集う学生との「共創」による三田の新しいまちづくりについて市民の皆さんと共有するため、昨年開学130周年、今年神戸三田キャンパス開設25周年と節目の年を迎え、さらなる教育の充実を目指し、神戸三田キャンパスに新学部を開設する予定の同大学 村田（むらた） 治（おさむ）学長をお迎えして、お話を伺いました。

「境界を越える革新者」にとにかくチャレンジし続けてほしい

Osamu Murata

まちの強み ―「学びの都（まち）三田」

三田市では、ニュータウン開発当初から、まちづくりにおいて、高等教育機関の存在を大切にしてきました。「学びの場」であり、「若者が集う場」でもある大学等がまちにあることの意義などについてお聞かせください。

市長　市では、人口減少や少子高齢化に対応するため、「成長から成熟のまち」への転換を目指し、まちを元気にする「地域の創生」に取り組んでいます。その中で、「学びの都（まち）三田」を掲げ、関西学院大学（以下「関学」）や湊川短期大学など多くの高等教育機関等と、教育、子育て、環境、防災などあらゆる分野で連携しながらまちづくりを行っています。市には人口減少、高齢化などさまざまな課題がありますが、それらに個別に対応するのではなく、総合的に考え、どう対応していくかが大切であり、市内の高等教育機関の知的資産をまちづくりに生かしていくことはもとより、学生など若者の力にも期待しているところです。

学長　仰（おっしゃ）るとおり若者の力はとても大切だと考えます。三田には農村、市街地、ニュータウンなど、さまざまなまちの要素があります。しかも、さまざまな知識や経験を持った人材も豊富です。しかし、都会への人材流出が続いているように思います。この課題は三田だけではなく日本の課題でもあります。他市において、高齢化による地域課題に、地域の多様な主体が一緒になって対応する試みがなされている事例もあります。しかし、学生が十分に関われていないようです。当然のことながら、高齢化により地域の担い手は減少していくので、それでは取り組みは持続しません。やはり、これらの課題解決のためには若者が一緒になってまちづくりに取り組む必要があります。神戸三田キャンパスにある総合政策学部は、まちづくりへの関わりなど社会での実践を通じて学ぶということがもともとの教育理念としてありますから、まちづくりにおいて大きな力になると思います。

市長　大変心強いですね。三田市に在る高等教育機関が、三田の課題や若者を生かしたまちづくりの重要性など、共通の認識を持っていることはとても励みになります。大学やそこに集う学生の皆さんと同じ方向性でまちづくりに取り組めるなど、高等教育機関があることはまちの強みであり、宝だと思います。

神戸三田キャンパス開設時の三田駅前商店街のにぎわい（関西学院提供）

学びと成長の場 ―三田の魅力と可能性

今年、神戸三田キャンパスが開設25周年を迎えられる中、昨年には理系学部の強化など学部の再編構想を発表されました。若者の学びや成長の場として三田を選んだ理由などについてお聞かせください。

学長　今回の再編では、学問の分野を超え、国境も越えて新しい価値を生み出せる学生の育成を目的に、「Be a Borderless Innovator（境界を越える革新者）」をコンセプトとして掲げています。本学では、開学150周年に向けて策定した将来構想において、教育の最上位の目標を、卒業生が「真に豊かな人生」を送ることとしており、今後、18歳人口の大幅な減少、人工知能（AI）の発達により、就労などを含む社会の在り方が大きく変化する中で、そうした「革新者」こそ、隣人・社会・世界に貢献し続ける「真の豊かさ」を得ることができると考えるからです。

市長　確かに、これからはグローバルなことと地域のことを、ひとつながりで考える視点などが必然となってくると思います。そういう発想や行動をする人材の育成は非常に重要で、学長が掲げておられるコンセプトに強く共感します。

学長　そうなんです。このコンセプトのもと、学問の分野を超えた教育システムをつくることとしていますが、その際に、キャンパスが三田に在るということが生きてきます。例えば、三田には農業の営みがありますので、再編により新設する生命環境学部との連携が期待できます。また、三田市の課題は日本の課題でもあるというお話しをしましたが、三田市の課題から学生が学びを得る「実践の場」があれば、日本全体の課題解決にも貢献できますし、本学が教育目標を目指す上でも、学生の成長を考えた上でも大変魅力があります。そして、そのような場を生かし、一緒にまちづくりに取り組んでいく―この取り組みが成功すれば、**「三田モデル」**ができますので、全国のモデルとなって波及していくのでは、と考えています。

市長　仰（おっしゃ）るように、三田市は日本の縮図であり、抱える課題の構造が同じです。本市で高等教育機関や学生の皆さんと連携して行う取り組みは、日本の課題解決のモデルとなる可能性があります。またその取り組みにより、弱みを乗り越えることで得た知見やノウハウが、私たちの財産となり、強みになります。

学長　そうですね。例えば、神戸三田キャンパスは都心部からは遠い。しかし、郊外にあっても人気の大学が他市であるように、肝心なのは中身です。この例ひとつをとっても、弱みをどう強みに変えていくかが大切だと考えています。そうした視点から、大学として三田市の課題解決にも関わっていきたいと思います。

「若者の力」をまちづくりへ

このように市や大学など高等教育機関が連携して共にまちづくりを行う中、これからの地域創生において「若者の力」に期待しているところをお聞かせください。